

「美味しいミルクの 第1回 生まれるところ」 別海町、酪農の今を知る旅へ。



訪れたのは生乳生産量日本一の町

北海道の野生動物をテーマに全道各地取材している筆者ですが、「今回は酪農を描きませんか？」とのお声掛けに即、快諾。北海道を代表する家畜について知りたいという好奇心と、何より乳製品好きなもので興味が湧きました。

毎日欠かせない牛乳。このミルクを生む酪農地帯の印象といえば、広大な牧草地に放牧される牛たち、牛舎で搾乳されて……と過去の記憶をつないでいると、「きっとそのイメージは変わると思いますよ」と北海道開発協会さん。今回の旅で、その意味を徐々に理解していきました。

目的地は人口の約7倍もの牛が飼育されている(!)

別海町。ひとつの町で十万頭以上の牛を飼育しているのはこの町だけ。そんな話を聞きつつ、昨年の秋、札幌から中標津へ飛び、空港からドライブしながら道東らしい景色を堪能します。まっすぐな道、牧草地と防風林の格子模様、ときどき牛たちが点々と。役場や郷土資料館などを訪ねて話を聞き、さまざまな酪農の現場を見学しました。

寒さに強く暑さに弱い乳牛にとって北海道は飼育に適した場所。別海町でも昭和初期に酪農への転換が始まり、入植者も増えていきます。昭和30年代には『根釧パイロットファーム』が建設され、やがて近代的で安定した酪農経営へと発展。食糧基地として大きな役割を担う存在となりますが、昭和54（1979）年の生産調整以降、乳価の低迷、貿易自由化により厳しい状況に。経営の厳しさから離農する農家も増えていきました。また、全国で担い手不足が今に続く課題となっています。

そこで今、別海町では『別海町担い手支援協議会』が就農を手助け。農協や役場、学校など、地域ぐるみで酪農に興味のある人を応援する仕組みが整えられ、新規就農や酪農に携わる人材を育てています。経営面でも無理なく続けていける支援制度で就農後も安心。実際に支援されている方々の一生懸命な説明を聞き、酪農家になることは決して高いハードルではないのだなと感じました。





自分が牛だったらどう飼われたい?と
小林さんが考えて作った牛舎。
中ご乳牛が歩き回れるフリーストール式で
牛たちは自由に寝て起きて
好きな時に搾乳してもらいます



牛はとても繊細。
新しい牛舎に慣れるまでは
半年もかかったそう。
今ではとてもおんびりして
見えます。
「牛がモグモグと反すう
しているときは三畜たさんで
リラックスしているんですよ」と小林さん

搾乳する時、牛の体を
一気に血が通るんです。
それだけ体かたむいてる。
コップに注いだミルクの向こう側に
牛の命を感じてもらったら
うれしいですね



小林晴香さん
株式会社 mosil

牛も人も、そして牛乳も健やかに感じた今の酪農

今回の旅で特に印象的だったのが小林さんの牧場です。まず、機械化された設備に驚かされました。広々とした牛舎では牛たちが自由に動きまわり、なんと自分から搾乳の場所に入って乳搾りされています（この搾乳ロボットがまたすごいのですが字数が足りません）。餌やり、空調管理、フンを集めるスクレーパーも自動化。牛の健康面や発情についてもコンピューターでデータを取って管理。ここまで自動化できるとは！「もちろん、飼育のためには自分の目でよく観察することも大事ですよ」と案内してくれたのは若き牧場主、4代目の小林晴香さん。親の後を継いだころは繋ぎ飼い牛舎で、一頭一頭の搾乳と餌やりで重労働。女性が酪農業を続けていくには機械化が必要と感じ、牛も人もストレスが少なくなる牛舎にしたいとフリーストール牛舎（牛が自由に歩き回れる造り）を建てました。

まだまだ女性経営者は珍しく、後継には向かないと思う人もいる業界。新牛舎を建てる際、夢の実現に向けてJAに相談すると、女性だからといった対応の差は感じなかったそう。「アドバイスや支援を受けて、熱意は伝わるなと思いました」。時代の変化を感じたという小林さん。「この仕事は牛、牧草、機械、経営、雇用などのスキルが必要で大変だけど、やりがいは大

きいです」。肉体労働が軽減された分、牛のケアや経営のアイデアを試す時間も生まれ、各地の女性酪農家たちとも繋がって活動の幅も広がったそう。「女性が活躍できる場が増えると視野が広がり、業界全体の可能性も変わってくると思うんですよ」。小林さんの目標は80歳になっても現役！牛も人も地域もハッピーな未来を描いている話にワクワクします。

見学中、「搾りたての牛乳はあったかい！って牧場見学の方が驚かれるんですよ」との言葉に筆者もハッとしました。その温かさは牛の体温。仔牛を産んだお母さん牛がいるからおいしい牛乳が飲める。冷蔵庫が出してくれるわけではありません。毎日飲んでいるのに忘れていた。同じ哺乳類として、目の前の母牛に感謝しました。

別海町には家畜の排泄物を再生するバイオガスプラントがあり、循環のシステムが生まれています。また、酪農による道東の自然や漁業への影響を考えた条例も運用。産業が環境へ配慮するのが当たり前の時代なのです。

マスクをしているせいだけではなく、以前と比べるとはるかに堆肥や糞尿のニオイが薄らいだと感じた今回の酪農旅。確かに、昔ながらの酪農とは違うイメージに書き換えられました。別海の牛乳、おいしかったな。

新岡 薫／エトブン社

札幌出身のイラストレーター。北海道の野生動物を中心に絵と文を描くことをライフワークとし、取材旅を通じたイラストコラムを制作している。著作にコミックエッセイ「狩りガールが旅するおいしいのはじまり（講談社）」、etobunsha.com